Eco-Philosophy

Vol.12

TIEPh

Transdisciplinary Initiative for Eco-Philosophy

東洋大学『「エコ・フィロソフィ」研究』第 12 号
―山田利明先生退職記念号―

contents

はじめに　河本英夫 1

国際哲学研究センター活動組織 3

2017 年度活動内容一覧 7

I　研究論文

「中国史に見る人口激減現象について」　山田利明 15

「ブリコルール熊楠―「やりあて」とブリコラージュをめぐって―」

唐澤太輔 25

「明治年間の「浦島」たち―「小説」と「戯曲」と「児童文学」」

早川芳枝 39

「『女神』における喪失感が伴う恋愛詩―郭沫若の恋愛と罪の意識」

横打理奈. 49

「海と山の狭間――石巻の再生・展開」　河本英夫 65

「環境――アートフェスティヴァル」　河本英夫 73

「経験の記述：働きの存在論（2）　―オートポイエーシスにおける二重の自己」

稲垣諭 85

Ⅱ　特集：山田利明先生退職記念

山田利明先生　略歴・業績一覧 107

特別対談：「エコ・フィロソフィ 13 の向こうへ」

山田利明・河本英夫 115

Ⅲ　Summary 129

はじめに

国際哲学センター（「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ）
センター長　河本英夫

エコ・フィロソフィは生活環境から地球環境にまでつながる広大な課題領域である。課題も切り口も、夥しくある。画期的な展開のある領域ではないが、息長く積み上げていく領域でもある。
ことに身体から環境へとつながる回路は、いまだ多くの課題に直面しており、将来的には障碍者や高齢者にとっての環境の設計という、喫緊の課題にまでつながる課題領域でもある。環境内でのアート作品の造形が、同時に身体的な効果をもつように設計していく課題は、さまざまなかたちで進んでもいる。

日本全国に夥しく出現している「空き家」をどのようにして生活環境として活用するかは、大きな課題であり、そこをアート作品と連動させる形で取り組んでいくやり方は成立するに違いない。つまり空き家に手を入れて再度住めるようにするということとは異なる方向で活用するのである。壊れていくものを直すというのではなく、壊れ方を組み換えて、人間の経験にとって有効であるように作り替えてしまうことはできる。また 2017 年 8 月に石巻・牡鹿半島で行われたように、地域全体をひとつのアート・ゾーンとしてリセットしてしまうような広大な企画も、試みとして成立するに違いない。ここでは復興をアートとして展開したのである。地域おこしにもつながり、人と物流の移動が新たに作り出された。

今年度から、情報連携学部に多くのスタッフが赴任され、またこのプログラムに参加していただけるようになった。川越の総合情報学部からの参加も見込めるようになった。新たなスタッフの参加によってエコ・フィロソフィの課題も変化していく。大学の近くの水田を借りて、「体験的稲作」を行うようなテーマも実行できるところまで来ている。また全学総合の全学テレビ授業にも多くの学部から参加していただけるようになった。学部を超えた環境教育は、ようやく展開可能な場面に来たように思われる。

ながらくエコ・フィロソフィを運営し、適宜課題設定を行っていただいた山田利明先生が、今年度で定年退官となった。月日は百代の過客のように否応なく過行くが、想起される過去の年月は、信じられないほど短く、あっという間である。だがわずかずつでも前進していくプロジェクトとしての試行錯誤は、想起できる以上に多くの可能性に満ちてもいた。山田先生とは、道志村や八丈島にともに視察に行った。ともかくも現場を歩き、現場を感じ取り、そこに含まれた多くの可能性と多様性を感じ取ることが必要だった。これらは追憶以上に貴重な思い出ともなっている。山田利明先生の長年のご尽力に、衷心より感謝申し上げたい。

国際哲学研究センター 活動組織

Hideo KAWAMOTO	Professor	河本 英夫　代表（センター長）
Tsutomu SAGARA	Professor	相楽 勉
Toshiaki YAMADA	Professor	山田 利明
Shogo WATANABE	Professor	渡辺 章悟
Satoshi INAGAKI	Professor	稲垣 諭
Bin UMINO	Professor	海野 敏
Tomoko OKAZAKI	Professor	岡崎 友子
Hajime KIMURA	Professor	木村 一
Hiroyuki KOSE	Professor	小瀬 博之
Yoshiyuki SHIMODA	Professor	下田 好行
Satoshi SHOJIGUCHI	Professor	小路口 聡
Michiya SUZUKI	Professor	鈴木 道也
Sumio TAKABATAKE	Professor	高畠 純夫
Makio TAKEMURA	Professor	竹村 牧男
Taigen HASHIMOTO	Professor	橋本 泰元
Keisuke HANAKI	Professor	花木 啓祐
Nanako MURATA	Professor	村田 奈々子
Ryosuke YAMAMOTO	Professor	山本 亮介
Shogo IWAI	Associate Professor	岩井 昌悟
Yuko KANEKO	Associate Professor	金子 有子
Harumi GOTO	Associate Professor	後藤 はる美

Nobuhiro TSUJIUCHI	Associate Professor	辻内 宣博
Kiyoaki MIENO	Associate Professor	三重野 清顕
Kuninobu SAKAMOTO	Assistant Professor	坂本 邦暢
Kana MIZUTANI	Assistant Professor	水谷 香奈
Takeshi OHNO	Research Fellow	大野 岳史（客員研究員）
Hisayoshi MIYAMOTO	Research Fellow	宮本 久義（客員研究員）
Toshio HORIUCHI	Research Fellow	堀内 俊郎（客員研究員）
Tadao INOUE	Research Fellow	井上 忠男（客員研究員）
Kenneth TANAKA	Research Fellow	ケネス 田中（客員研究員）
Takashi HARIMOTO	Research Fellow	播本 崇史（客員研究員）
Kohei YOSHIDA	Research Fellow	吉田 公平（客員研究員）
Shinji MUTO	Research Fellow	武藤 伸司（客員研究員）
Rina YOKOUCHI	Research Fellow	横打 理奈（客員研究員）
Taisuke KARASAWA	Research Fellow	唐澤 太輔（客員研究員）
Hideto NOMURA	Research Fellow	野村 英登（客員研究員）
Yoshie HAYAKAWA	Research Fellow	早川 芳枝（客員研究員）
WANG Yuan	Research Fellow	王 媛（客員研究員）
Yoshiya TAMURA	Research Fellow	田村 義也（客員研究員）
Yoriyuki SAKAMOTO	Research Fellow	坂本 頼之（客員研究員）
Katsuzo MURAKAMI	Research Fellow	村上 勝三（客員研究員）
Takashi NAGASHIMA	Research Fellow	長島 隆（客員研究員）
Fumiaki GENGINDANI	Research Fellow	現銀谷 史明（客員研究員）
Mie ISHIKAWA	Research Fellow	石川 美恵（客員研究員）

Atsushi TAKAHASHI	Research Fellow	高橋 厚（客員研究員）
Yoshiyuki HIRONO	Research Fellow	廣野 喜幸（客員研究員）
Mitsuhiro OHNISHI	Research Fellow	大西 光弘（客員研究員）
Dai IWASAKI	Research Supporter	岩崎 大（研究支援者）
Yuji MISAWA	Research Supporter	三澤 祐嗣（研究支援者）
Tasuku FUJISAKA	Project Research Assistant	藤坂 大佑（PRA）

2017 年度活動内容一覧

※IRCP 研究員は下線表記

６月

・３日

研究ユニット　「情報科学技術社会」　キックオフミーティング

開会挨拶：河本英夫

登 壇 者：海野敏、清水高志

場　　所：東洋大学白山キャンパス 6 号館 1 階第三会議室

７月

・２６日

研究会「西洋自然観との対峙における日本哲学の形成」第 1 回

登 壇 者：鈴木道也

司　　会：相楽勉

研究打ち合わせ：山本亮介、木村一、鈴木道也、相楽勉

場　　所：東洋大学白山キャンパス 6 号館 1 階第 3 会議室

・２９日

研究ユニット「情報科学技術社会」第 2 回研究会「情報、身体、ネットワーク―21 世紀の情報理解に向けて―」

開会挨拶：河本英夫

登 壇 者：西垣通、廣野喜幸

司　　会：坂本邦暢

場　　所：東洋大学白山キャンパス 6 号館 2 階 6209 教室

９～１月

・東洋大学の「全学総合授業」として「エコ・フィロソフィ入門」を開講

2017 年度 全学総合 IB『エコ・フィロソフィ入門』

講　　師：河本英夫、山口一郎、相楽勉、北脇秀敏、金子有子、八木信行、花木啓祐、小瀬博之、坂本邦暢、山谷修作、山田利明、三重野清顕、安斎利洋、稲垣諭、岩崎大

９月

・９日

「現代アジアにおける聖者崇拝の諸相」 第 1 回研究会（共催：「南アジア思想・文化」研究会第 1 回）

開会挨拶：宮本久義

趣旨説明：井田克征

登 壇 者：佐々木聡、久留島元、拓徹、高尾賢一郎

場　　所：東洋大学白山キャンパス 9 号館 2 階第 4 会議室

・３０日

研究会「西洋自然観との対峙における日本哲学の形成」第 2 回

登 壇 者：坂本頼之、播本崇史、小路口聡、吉田公平

司　　会：相楽勉

場　　所：東洋大学白山キャンパス 9 号館 2 階第 4 会議室

・３０日

国際哲学研究センター主催ワークショップ「文学はどう見られていたか――古代・中世・近代の変遷」

開会挨拶：三重野清顕

登 壇 者：田中一孝、岡本広毅、八幡さくら

討論司会：坂本邦暢

閉会挨拶：辻内宣博

場　　所：東洋大学白山キャンパス 2 号館 16 階スカイホール

１０月

・１４日

連続研究会「近世哲学への新視点」第 1 回

登 壇 者：笠松和也、寅野遼、星川竜之介

場　　所：東洋大学白山キャンパス 6 号館 4 階 6404 教室

・２１日

国際哲学研究センター主催シンポジウム「聖典はどのように伝えられたのか―宗教の言葉と思想を考える」

登 壇 者：梶原三恵子、森祖道、渡辺章悟、現銀谷史明

討論司会：宮本久義

場　　所：東洋大学白山キャンパス 6 号館 4 階 6404 教室

１１月

・２２日

国際哲学研究センター主催「即興ダンスワークショップ　テーマ『“舞踏？”ワークショップ～舞踏とは何か？』」

講　　師：向雲太郎

場　　所：東洋大学白山キャンパス 5 号館地下 2 階井上円了ホール

・２５日

連続研究会「近世哲学への新視点」第 2 回

登 壇 者：渡邊裕一、竹中久留美

場　　所：東洋大学白山キャンパス 6 号館 4 階文学部会議室

１２月

・１６日

国際哲学研究センター主催ワークショップ「哲学と歴史学とを生涯学習として学ぶ意義」

開会挨拶：鈴木道也

登 壇 者：川添信介、高山博、矢口悦子

討論司会：辻内宣博

閉会挨拶：坂本邦暢

場　　所：東洋大学白山キャンパス 2 号館 16 階スカイホール

・１９日

国際哲学研究センター主催「南アジア思想・文化」研究会 第 2 回

登 壇 者：橋本泰元

場　　所：東洋大学白山キャンパス 6 号館 4 階文学部会議室

・２３日

国際哲学研究センター主催「第九回　人間再生研究会」

特別講演：山口光國

講　　演：稲垣諭

症例研究：大越友博、唐沢彰太

討論司会：河本英夫

場　　所：東洋大学白山キャンパス 6 号館 2 階 6209 教室

・２４日

国際哲学研究センター主催シンポジウム「自然と人間の関わりの在り方を追究する」

開会挨拶：河本英夫

登 壇 者：山田利明、花木啓祐、嘉田由紀子、中静透

討論司会：河本英夫、金子有子

閉会挨拶：河本英夫

場　　所：東洋大学白山キャンパス 8 号館 7 階 125 記念ホール

1 月

・１６日

国際哲学研究センター主催「南アジア思想・文化」研究会 第 3 回

登 壇 者：三澤祐嗣

場　　所：東洋大学白山キャンパス 6 号館 4 階文学部会議室

・２０日

研究ユニット「情報科学技術社会」第 3 回研究会「情報、 技術、 ネットワーク―21 世紀の情報理解に向けて―」

開会挨拶：河本英夫

登 壇 者：信原幸弘、木村一基

場　　所：東洋大学白山キャンパス 6 号館 2 階 6210 教室

・２０日

連続研究会「近世哲学への新視点」第 3 回

登 壇 者：有賀雄大、佐藤真人

場　　所：東洋大学白山キャンパス 6 号館 4 階 6404 教室

２月

・１７日～１８日

連続研究会「近世哲学への新視点」第 4 回

登 壇 者：大西克智、今井悠介、大野岳史

場　　所：東洋大学白山キャンパス 1 号館 5 階 1503 教室

・「神経現象学リハビリテーション研究」第 3 号（「エコ・フィロソフィ研究」特集別冊）発行

３月

・「エコ・フィロソフィ」研究第 12 号、別冊第 12 号発行

・「国際哲学研究」7 号、別冊 10 号発行

・『哲学のメタモルフォーゼ』（晃洋書房）刊行

編 著 者：河本英夫、稲垣諭

著　　者：吉永和加、三重野清顕、坂本邦暢、清水高志、山口一郎、廣瀬浩司、大崎晴地、十川幸司

・活動報告会（評価委員会）

I　研究論文

Ⅱ　特集：山田利明先生退職記念

山田利明先生　略歴

1947 年 6 月　：東京都墨田区吾嬬町にて出生。

1954 年 4 月　：墨田区立木下川小学校入学。

1960 年 4 月　：千葉県市川中学校入学。

1963 年 4 月　：同　市川高等学校入学。

1966 年 3 月　：同　卒業。

1967 年 4 月　：東洋大学文学部入学。

1971 年 3 月　：同　文学部中国哲学文学科卒業。

4 月　：同　大学院文学研究科入学。指導教授は金岡照光教授。

1973 年 3 月　：同　文学研究科中国哲学専攻修了（文学修士）。

4 月　：大正大学大学院文学研究科博士課程入学。吉岡義豊教授に師事。

10 月　：東京都立第一商業高等学校非常勤講師（‘76 年 3 月まで）

1976 年 3 月　：大正大学大学院文学研究科博士課程単位取得満期退学。

4 月　：大正大学文学部助手（‘86 年 3 月まで）。

：東海大学文学部非常勤講師（‘80 年 3 月まで）

1977 年 2 月　：福田さち子と結婚

12 月　：長女斉子誕生

1983 年 9 月　：カリフォルニア大学バークレイ校東洋言語学科客員研究員。

エドワード・シェファー教授の指導を受ける。（‘84 年 3 月まで）

1986 年 4 月　：東洋大学文学部専任講師。

1987 年 4 月　：日本道教学会評議員

1990 年 3 月　：東洋大学文学部助教授

1991 年 4 月　：日本大学文理学部非常勤講師（‘95 年 3 月まで）

1993 年 4 月　：日本道教学会監事。

1995 年　　：博士（文学）（大正大学）

1996 年 4 月　：日本道教学会理事（現在に至る）。

1997 年 4 月　：東洋大学文学部教授（現在に至る）。

1998 年 9 月　：岩手大学非常勤講師（集中講義）。

1999 年 4 月　：東洋大学文学部中国哲学文学科主任。（‘02 年 12 月まで）。

2001 年 4 月　：立教大学全学カリキュラム非常勤講師。（‘02 年 3 月まで）。

2002 年 4 月　：早稲田大学文学部非常勤講師。（‘03 年 3 月まで）。

12 月　：東洋大学文学部長。（‘07 年 3 月まで）。

2007 年 4 月　：東洋大学副学長・教務部長（‘09 年 9 月まで）

10 月　：東京都教育委員会進学問題検討委員会委員（‘08 年 3 月まで）

2009 年 1 月　：日本道教学会会長。（‘13 年 12 月まで）

12 月　：学校法人東洋大学理事（‘12 年 11 月まで）

2010 年 4 月　：一般社団法人サステイナブル・サイエンス・コンソーシアム理事。（現在に至る）

2011 年 5 月　：東洋大学エコ・フィロソフィ学際研究イニシアティブ研究センター長。
（現在に至る）

2013 年 1 月　：宇都宮大学国際学研究科学位論文審査委員会委員。（同年 3 月まで）

4 月　：日本中国学会評議員（‘15 年 3 月まで）

2014 年 4 月　：東洋大学大学院文学研究科長（‘16 年 3 月まで）

2015 年 8 月　：日本学術振興会専門委員、国際事業委員会審査員（‘16 年 7 月まで）

＜業績一覧＞

著書

『六朝道教儀禮の研究』、東方書店、1999 年 1 月

『中国学の歩み：二十世紀のシノロジー』、大修館書店、1999 年 12 月

『道法変遷：歴史と教理』、春秋社、2002 年 7 月

編著

遊佐昇共編『中国文人書画名鑑』、共編著、世界聖典刊行会、1981 年 10 月

野口鉄郎・福井文雄・坂出祥伸共編『道教事典』、共編・項目執筆、平河出版社、1994 年 4 月

田中文雄共編『道教の歴史と文化』、共編、雄山閣出版、1998 年 5 月

福井文雅共編『道教と中国思想』(『講座道教』巻 2)、共編・論文執筆、雄山閣出版、2000 年

論文

「太平広記神仙類巻第配列の一考察」、『東方宗教』43、日本道教学会、1974 年 4 月

「中国の学問神信仰初探」、『東洋学術研究』14 巻 4 号、東洋哲学研究所、1975 年 7 月

「祭天と道教に関する二,三の問題」、『大正大学研究紀要』62、大正大学、1976 年 11 月

「神仙李八百伝考」、吉岡義豊博士還暦記念『道教研究論集』、国書刊行会、1977 年 6 月

「李家道についての再倹討」、『中国学研究』2、大正大学中国学研究会、1978 年 3 月

「李家道とその周辺」、『東方宗教』52、日本道教学会、1978 年 10 月

「『太上洞淵神呪経』の図讖的性格—その成立をめぐって」、『大正大学研究紀要』66、大正大学、1981 年 2 月

「『文始先生无上真人関令内伝』の成立について」、『酒井忠夫先生頌寿記念—歴史における民衆と文化—』、国書刊行会、1982 年 9 月

「神仙道」、『道教』1、平河出版社、1983 年 2 月

「『老子化胡経』類」、『敦煌と中国道教』、大東出版社、1983 年 12 月

「敦煌文書と仙伝類」、『敦煌と中国道教』、大東出版社、1983 年 12 月

「『霊宝五符』の成立とその符瑞的性格」、『讖緯思想の総合的研究』、国書刊行会、1984 年 2 月

「道蔵十二類成立に関する一資料の背景」、『牧尾良海博士頌寿記念論集　中国宗教・思想と科学』、国書刊行会、1984 年 6 月

「西域を旅した人びと」、『歴史公論』11 巻 12 号、雄山閣出版、1985 年 12 月

「「醮」の語について　On the word of Chao 醮」、『中国学研究』5、大正大学中國學研究會、1986 年 3 月

「『五符序』形成考――楽子長をめぐって――」、『道教と宗教文化』、平河出版社、1987 年 3 月
「老子と道教」、『老子の世界』、新人物往来社、1988 年 1 月
「初期霊宝経の養生思想」、『中国古代養生思想の総合的研究』、平河出版社、1988 年 2 月
「二つの神符――「五岳真形図」と「霊宝五符」――」、『東洋学論叢』10、東洋大学、1988 年 3 月
「泥丸九宮説考」、『東洋学論叢』13、東洋大学、1988 年 3 月
「東晋における道教の瞑想法の展開」、『東洋大学大学院紀要』25、東洋大学大学院、1989 年 2 月
「Longevity Technigues and Compilation of the Lin-pao Wu-fu-xu, 霊宝五符序」、『Taoist Meditation and Longevity Techniques』、Univ. of Michigan
「洞房神存思考」、1989 年 11 月、『東方宗教』74、日本道教学会、1989 年 6 月
「『霊宝度人経』と霊宝祭儀の形成――「道君序」の誦経儀礼」、『東洋学論叢』16、東洋大学、1991 年 3 月
「『太上洞淵神呪経』補説」、『中国学研究』10、大正大学、1991 年 3 月
「霊宝斎における斎戒の意義――懺悔と功徳――」、『台湾の宗教と中国文化』、風響社、1992 年 6 月
「六朝における『太平経』の伝承」、『中国哲学文学科紀要』1、東洋大学文学部、1993 年 3 月
「道教における斎法の成立」、『東洋学研究 31　アジアの宗教と文化』、東洋大学東洋学研究所、1994 年 3 月
'Repentance Rituals in Taoism and Chinese Buddhism'、"Buddhisme et cultures locales"、École française d'Extrême-Orient,Pris、1994 年 12 月
'The Evolution of Taoist Ritual　;K'ou Ch'ien-chin and Lu Hsiu-ching'、"The Basic Structure of Taoism"、"Acta Asiatica"68、東方学会、1995 年 2 月
「道教神像の崇拝」、『東洋大学中国哲学文学科紀要』3、東洋大学文学部、1995 年 3 月
「道教と日本文化―宗教玩具の視点から」、『日本の人形・玩具』1、日本人形玩具学会、1996 年
「『老子』の現代的意義―欧米における視点」、『老荘思想を学ぶ人のために』、世界理想社、1997 年 11 月
「誕怪不経の正史――『後漢書』方術伝の哲学」、『中国研究集刊』往 21、大阪大学中国学会、1998 年 3 月
「霊宝経と大乗思想――霊宝斎の思想的基盤」、『東洋大学中国哲学文学科紀要』6、東洋大学文学部、1998 年 3 月
「道教と道家思想、その概念をめぐって」、『しにか』9 巻 12 号、大修館書店、1998 年 12 月
'The Lingbao School'、"Daoism Handbook－Handbook of Oriental Studies"、Brill,Netherlands、2000 年 1 月
「冥界と地下世界の形成」、『死後の世界　インド・中国・日本の冥界信仰』、東洋書林、2000 年 2 月
「張萬福修醮考」、『東洋の思想と宗教』17、早稲田大學東洋哲學會、2000 年 3 月
「儀礼の理論」、『講座道教第 2 巻・道教の教団と儀礼』、雄山閣出版、2000 年 5 月

「死の思想と道教」、『講座道教第 4 巻・道教と中国思想』、雄山閣出版、2000 年 8 月

「露伴と道教」、『季刊日本思想史』57、ぺりかん社、2000 年 12 月

「気韻生動——宗教としての山水」、『東洋大学中国哲学文学科紀要』10、東洋大学文学部、2002 年 3 月

「仏像東漸——東方学をめぐる歴史的研究について」、『東方学の新視点』、五曜書房、2003 年 10 月

「神秘の山水——宗炳『画山水序』の思想」、『宮澤正順博士古稀記念　東洋—比較文化論集—』、青史出版社、2004 年 1 月

「北魏道教の一側面」、『東洋大学中国哲学文学科紀要』12、東洋大学文学部、2004 年 3 月

「異聞の文化志——李八百伝の変遷」、佐藤成順博士古稀記念論文集『東洋の歴史と文化』、山喜房仏書林、2004 年 4 月

「「三百六十契令」考」、『アジア文化の思想と儀礼—福井博士古稀記念』、春秋社、2005 年 6 月

「陳寅恪の道教研究——近代知識人の視点——」、『詩と神話』5、日本聞一多学会、2005 年 12 月

「関于“五嶽真形図”之傳入日本」、『第一届国際道家学術会議論文集』、連合報文化基金国学文献館、2005 年 12 月

「「魏文朗仏道造像碑」一則」、『東洋大学中国哲学文学科紀要』14、東洋大学文学部、2006 年 3 月

「道教儀礼研究の現在　道教儀礼の研究の成果と課題」、『道教研究の最先端』、大河書房、2006 年 8 月

「近代人文学と清朝考証学」、『詩と神話』6、日本聞一多学会、2006 年 12 月

「近代人文学と中国民俗学—許地山『扶箕迷信的研究』」、『東洋大学中国哲学文学科紀要』16、東洋大学文学部、2008 年 3 月

「基調報告—三世紀初期における宗教的共生の一例」、『第 3 回日米道教研究会議論文集　道教と共生思想』、大河書房、2009 年 10 月

「鬼を責む——劾鬼の宗教的展開」、『東洋大学中国哲学文学科紀要』19、東洋大学文学部、2011 年 3 月

「三宅元珉『老子道徳経會元』提要」、『東洋大学中国哲学文学科紀要』20、東洋大学文学部、2012 年 3 月

「洞天の風景—神仙グロットの地誌—」、『超域する異界』、勉誠出版、2013 年 1 月

「謫仙の構造」、『東洋大学中国哲学文学科紀要』21、東洋大学文学部、2013 年 3 月

「火で洗う布：火浣布始末」、『国学院中国学会報』60、国学院大学中国学会、2014 年 12 月

「講演記録　六朝道教と佛教」、『六朝學術學會報』17、六朝学術学会、2016 年 3 月

翻訳

孫浮生著「浄土原流善導大師香積寺攷」、『中国浄土教論集』、文化書院、1985 年 6 月、

クリスチーヌ・モリエ原著「『洞淵神呪経』の祭儀の伝統——龍王の儀礼」、『日本・中国宗教文化の研

究』、平河出版社、1991 年 9 月

クリストファ・シペール原著「霊宝科儀の展開」、『日本・中国宗教文化の研究』、平河出版社、1991 年 9 月

テリー・クリーマン原著「川主―正統的地方信仰(上)」、『東方宗教』80(遊佐昇共訳)、日本道教学会、1992 年 11 月

テリー・クリーマン原著「川主―正統的地方信仰(下)」、『東方宗教』81(遊佐昇共訳)、日本道教学会、1993 年 5 月

『老君音誦誡経』訳稿(1)、『東洋大学中国哲学文学科紀要』10、東洋大学、2002 年 3 月

『老君音誦誡経』訳稿(2)、『東洋大学大学院紀要』文学 39、東洋大学、2002 年 3 月

書評・紹介

李豊楙著『魏晋南北朝文士与道教之関係』、『東方宗教』56、日本道教学会、1980 年 10 月

T・F・クリーマン著『神の自伝―文昌帝君化書』、『東方宗教』89、日本道教学会、1997 年 5 月

道教を知るための本(中国の歴史と文化を読むブックガイド)、『しにか』12 巻 4 号、大修館書店、2001 年 4 月

野口鐵郎・田中文雄共編『道教の神々と祭り』、『学燈』102 巻 2 号、丸善出版、2004 年 11 月

坂出祥伸著『道教とはなにか―気の宗教の本質』、『東方』303、東方書店、2006 年 5 月

丸山宏著『道教儀礼文書の歴史的研究』、『東方宗教』108、日本道教学会、2006 年 11 月

三浦国雄編『術の思想：醫・長生・呪・交霊・風水』、『東方宗教』125、日本道教学会、2015 年 5 月

坂出祥伸著『響き合う身体：「気」の自然観・瞑想法・占術』、『東方』414、東方書店、2015 年 8 月

報告・動向

「欧米道蔵研究会(Project Tao-tsang)による道蔵文献のコンピューター処理について」、『東方宗教』67、日本道教学会、1986 年 6 月

欧米における道教研究の現状、秋月観暎編『道教研究のすすめ』、平河出版社、1986 年 11 月

最近のアメリカの漢代研究二題：その視点にことよせて、『中国学研究』6、大正大学中国学研究室、1987 年 3 月

第 5 回日仏学術シンポジウム　東洋学第 1 部会経過報告、『日本・中国宗教文化の研究』、平河出版社、1991 年 9 月

第 6 回日仏コロック東洋学部会、『東方宗教』79、日本道教学会、1992 年 6 月

アメリカの道教研究―日米道教研究会議、『東洋大学中国哲学文学科紀要』4、東洋大学、1996 年 3 月

共同執筆・海外学会動向：第 35 回国際アジア・北アフリカ研究会議(ICANS)中国部会「日本人の目から見た中国宗教」報告、『東方宗教』91、日本道教学会、1998 月 5 月

事典類・事項執筆等

日原利国編『中国思想辞典』、項目執筆、研文出版、1984 年 4 月

『日本大百科全書』、項目執筆、小学館、1984 年

坂出祥伸編『道教の大事典』、項目執筆、新人物往来社、1994 年 6 月

峰島旭雄編『比較思想事典』、項目執筆、東京書籍、2000 年 8 月

Fabrizio Pregadio, The Encyclopedia of Taoism、項目執筆、Routledge、New York、2008 年 1 月

エコ・フィロソフィ研究編著

山田利明・河本英夫・稲垣諭編著『エコロジーをデザインする ：エコ・フィロソフィの挑戦』、編著、春秋社、2013 年 3 月

山田利明・河本英夫編著『エコ・ファンタジー ＝Eco fantasy：環境への感度を拡張するために』、編著、春風社、2015 年 9 月

エコ・フィロソフィ研究論文

「中国思想と共生の理論」、竹村牧男・松尾友矩編著『共生のかたち―「共生学」の構築をめざして』、誠信書房、2006 年 5 月

「中国思想の環境論 ： 自然・山水・風水」、『「エコ・フィロソフィ」研究』(1)、東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ、2007 年 3 月

「中国思想とエコ・フィロソフィ」、『「エコ・フィロソフィ」研究』(1)別冊、東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ、2007 年 3 月

「環境デザインとしての風水説」、『「エコ・フィロソフィ」研究』 (3)、東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ、2009 年 3 月

「環境デザインとしての風水説」、松尾友矩・竹村牧男・稲垣諭編『エコ・フィロソフィ入門―サステイナブルな知と行為の創出―』、ノンブル社、2010 年 1 月

「天地壊滅とメシア」、『「エコ・フィロソフィ」研究』 (5)、東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ、2011 年 3 月

「神禾原 ： 消えた森林 」、『「エコ・フィロソフィ」研究』 (6)、東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ、2012 年 3 月

「価値を生む思想」、『エコロジーをデザインする ：エコ・フィロソフィの挑戦』、春秋社、2013 年 3 月

「理想の大地 ： 福地の思想」、『「エコ・フィロソフィ」研究』 (7)、東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ、2013 年 3 月

「食料自給率」、『エコ・ファンタジー: 環境への感度を拡張するために』、春風社、2015 年 9 月

「風水説の思想」、『「エコ・フィロソフィ」研究』(10)別冊、東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ、2016 年 3 月

「方術から方技へ」、『「エコ・フィロソフィ」研究』(11)、東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ、2017 年 3 月

「中国史に見る人口激減現象について」、『「エコ・フィロソフィ」研究』(12)、東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ、2018 年 3 月

Ⅲ Summary

On Marked Population Declines seen in Chinese History

YAMADA Toshiaki

Zhao Wenlin and Xie Shujun coauthored *History of Chinese Population* (People's Publishing House, 1988) was the first book scientifically calculating changes in population seen in Chinese history. Reforms and open-door policies following the Great Cultural Revolution first enabled this book to be published, which gives an exhaustive good picture of the bright and dark sides of Chinese history from the standpoint of changes in population. Contrasting this book with Taketoshi Sato's *Chronology of Chinese Disaster History* (Kokushokankokai Inc., 1993) reveals that a principal cause of population decline was starvation.

In this article, I reveal from descriptions of history books the circumstances at the time population halved and discuss the true state thereof.

Keywords: war, famine, death by starvation, Chinese history, population

Bricoleur Kumagusu—Concerning "Yariate" and Bricolage

KARASAWA Taisuke

In this article, surrounding the word "Yariate" coined by Kumagusu Minakata (1867–1941, a naturalist, folklorist, myxomycete researcher) and the concept "Bricolage" advocated by Claude Lévi-Strauss (1908–2009, a cultural anthropologist), I compare and discuss the key concepts of their respective thought. Through this process, I reveal that what are essential in Minakata's "Yariate" are highly intuitive wisdom beyond analytical and objective knowledge, as well as tact, namely the ability to connect things belonging to different semantic fields each other.

"Yariate" is an intellectual Bricolage. It is extremely savage, nevertheless, is as beautiful as a "myth." Under extremely limited circumstances where there were few books and seldom information arrived from outside world, Minakata's Bricolage was performed to its full potential. In this article, quoting Minakata's discourses, I discuss the process he performed tact and

conducted “Yariate” in Nachi-san Mountain with his books “in hand” and the knowledge he had accumulated so far.

Keywords: Kumagusu Minakata, “Yariate,” tact, Lévi-Strauss, Bricolage

“Urashimas” in the Meiji Era—“novels,” “dramas” and “juvenile literature”

HAYAKAWA Yoshie

The so-called “Urashima Taro” is recognized as one of “old tales” or “fairy tales,” nevertheless, it was originally the stories recorded as historic events in those literatures in ancient Japan such as *Nihon Shoki*. Thereafter, diverse variations were developed in each era, and the stories, being translated into Waka and Noh songs, gradually spread. Since the early years of the Edo Era, the stories came to be recorded in books such as “Otogi Bunko” and published. Xylographic publishing became widespread, producing many parodies thereof as well as stories appropriating their motifs. In addition, from the first half through around middle years of the Meiji Era, Tokuchi Kodo, Rohan Koda, Ogai Mori, Shoyo Tsubouchi or the like published their respective works utilizing Urashima. On the other hand, Sazanami Iwaya compiled *Nihon Mukashibanashi* (Japanese Fairy Tales) series popularizing “old tales” as well as got involved in compiling national textbooks, which made his story pattern spread as “Urashima Taro” publicly known. Accordingly, in the present age, the stories often end at the timing Urashima Taro grows older, and such other types of ending as transforming into a crane or becoming a Taoist immortal are not publicly known so much.

Keywords: Urashima Taro, *Urashimako no Den*, *Otogi Zoshi*, *Kusazoshi*, juvenile literature, national textbook

Love Poems Accompanied by a Sense of Loss in *The Goddesses* —Love and a Sense of Guilt of Guo Moruo

YOKOUCHI Rina

Guo Moruo, prior to coming to Japan in 1914, got married with a woman his parents had determined. He could not feel affection for his wife, and engaged in free love with Sato Tomi, a Japanese woman he met after coming to Japan, leading to marriage with her out of legal system.

It should have been a longed love and an ideal marriage for Guo Moruo who experienced love only after coming to Japan. Nevertheless, upon going beyond Platonic relations, their love turned something undutiful and inadmissible to him because he could not give his virginity in spite of destroying her virginity. As a consequence, many of his love poems somehow cast a dark shadow.

Young men in the intellectual class of Japan at that time were supposed to be going to live a life as an elite bearing the destiny of the state on his shoulders. However, as a matter of fact, they agonized about their love in connection with their family (parents) rather than about the connection between an individual and the state. The self of Guo Moruo awakened in Japan was that of Chinese students, nevertheless, it was the same agony among young men in Japanese intellectual class in the Taisho Era. Guo Moruo agonized in the Taisho Era in Japan about the issues concerning family and concerning an individual. Guo Moruo performed creative activities amid such agony, resulting in love with his sweetheart accompanying something unpleasant, which influenced on his works noticeably.

Keywords: Guo Moruo, *The Goddesses*, agony, Taisho, love, guilt

The Narrow Area between the Sea and the Mountain

KAWAMOTO Hideo

Ishinomaki is a city near the mouth of the Kitakami River, and a district struck by three large tsunamis caused by Sanriku earthquake, Great Chilean earthquake, and the recent Great East Japan earthquake. The Oshika Peninsula is a peninsula extending from this district into the Pacific Ocean. Many NPOs and incorporated associations were organized and a new network for restoration had already got up and running. I visited the Oshika Peninsula for on-site inspection where Art Festival was to be held in the summer of 2017. In the attempt to utilize a natural environment as art, the focus would be how to make a local environment into a material for art. That was the purpose of my three-day visit.

Keywords: Ishinomaki, peninsula, A language and B language, tactual map

Environment—Art Festival

KAWAMOTO Hideo

Reborn-Art Festival was held in and around Ishinomaki City and the Oshika Peninsula in August 2017. It was a festival for as long as about 40 days. A hands-on exercise of two days and a night was established as one of the projects in the festival, and executed three times during the festival period. I, as a supervisor, established this exercise and deliberated over art works installed in the Oshika Peninsula. About 40 art works were exhibited ranging from those by seasoned artists to those by up-and-coming artists. These works were exhibited in the environment, and had points of contact with the environment, ranging widely as far as those changing their points of contact. I deliberated over some of the art works so as to cause their respective inherent nature demonstrated.

Keywords: Oshika Peninsula, Reborn-Art Walk, hands-on exercise, environment

Description of Experience: Ontology of Actions II—Double Selves in Autopoiesis

INAGAKI Satoshi

This article deals with the subject “two selves,” however, “self (auto, sich, Selbst)” I discuss here does not by itself mean “I” who live an everyday life, nor philosophical “ego” or “subjectivity.” Neither is my intent to rehabilitate philosophy of subjectivity. Instead, I am trying to establish the term “self” as one that can include world phenomena seen over a broader area, especially phenomena certain unit elements “dynamically form cluster/assemblage.” Through such process, I reveal double movements contained in self after the pattern of autopoiesis theory. The movements play roles in stabilization and destabilization, as well as structurization and functionalization. Finally, I point up the difference with Bateson’s “self” who advanced cybernetics.

Keywords: self, autopoiesis, cybernetics, structure, function

「エコ・フィロソフィ」研究　**Vol.12**
—山田利明先生退職記念号—
Eco-Philosophy Vol.12

平成 30 年 3 月　発行
編集：東洋大学国際哲学研究センター（「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ）事務局
〒112-8606　東京都文京区白山 5-28-20
Tel：03-3945-7534
E-mail：ml.tieph-office@toyo.jp
Homepage：http://www.toyo.ac.jp/site/tieph/